

今週の為替相場見通し(2021年6月28日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.72 ~ 111.11	110.79	109.80 ~ 112.30
ユーロ	(ドル)		1.1848 ~ 1.1975	1.1937	1.1830 ~ 1.2000
(1ユーロ=)	(円)		130.05 ~ 132.66	132.25	131.00 ~ 134.00
英ポンド	(ドル)		1.3787 ~ 1.4001	1.3870	1.3800 ~ 1.4050
(1英ポンド=)	(円)	*	151.32 ~ 155.16	153.76	152.50 ~ 155.50
豪ドル	(ドル)		0.7478 ~ 0.7616	0.7589	0.7600 ~ 0.7800
(1豪ドル=)	(円)	*	82.14 ~ 84.26	84.13	83.40 ~ 85.90

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1)今週の予想レンジ: 109.80 ~ 112.30 円

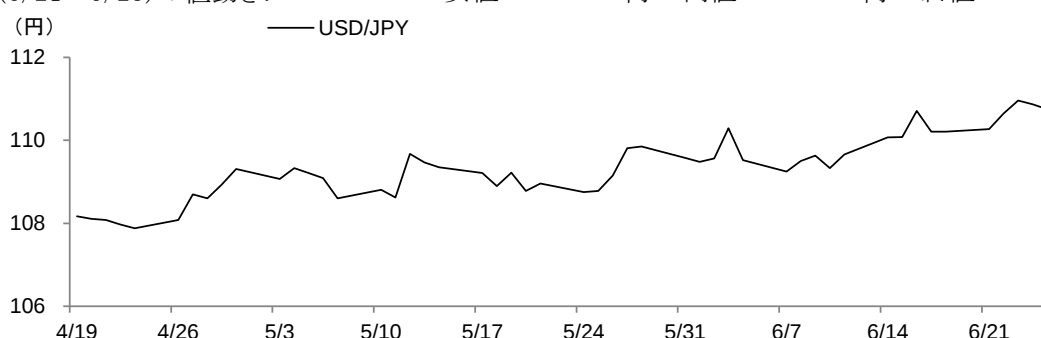
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は週半ばから後半にかけて上昇し年初来高値を更新。その後はやや下押しもあったが、総じて高値圏での推移となった。週初21日は110.20円でオープン。先週から続く株安を背景に広がったリスクオフの円買いに、米長期金利の低下も相まって、東京時間に週間安値となる109.72円まで下落。その後は株安の流れが一巡し、米長期金利も持ち直したことで110円台を回復してクローズ。22日は110円台半ばから徐々に上昇。パウエルFRB議長の「インフレは一時的である」との発言に勢いは継続しなかったものの、株式市場の反発を背景としたクロス円の売りにもサポートされ110円台後半を維持した。23日は前日から続く円売りの勢いに欧州時間には111.00円を突破。この水準では利益確定やポジション調整によるドル売りも相応に強く、一旦は下押しされるも、その後は緩やかに上昇を続け、111円手前での推移となった。24日は東京時間に週間高値となる111.11円まで上昇。その後は調整売りや週初めから続いた円売りが一巡したこともあり、110円台後半まで下落。米国時間には、新規失業保険申請件数が予想比悪化という結果になったもののドル/円の反応は限定的となり、前日と同水準でのクローズとなった。25日は111円に再度トライするも上値の重さが意識され、じりじりと値を下げる展開。PCEコアデフレーターが予想を下回る結果となると一時110円台半ばまで下落したが、すぐに持ち直し110.79円で越週した。

今週のドル/円は110円台を中心に底堅い値動きを予想する。最も注目すべきなのは7月2日(金)に発表が予定されている米6月雇用統計であろう。現在一時的との認識が大判を占めているが、インフレ率は確実に上昇しており、8月のジャクソンホールでテーパリング開始の明確な意図が示されるのではないかとの見方も強まっている。FRBの2大使命の1つである「物価の安定」において政策転換の必要性が迫っている中、もう一つの使命である「雇用の最大化」について検討する上で、最も影響力のある雇用統計で良好な結果が出た場合には、テーパリングの開始や金利引き上げのタイミングの更なる前倒しを意識される環境になるだろう。もちろん予想比悪化した統計が出た場合の下落リスクはあるものの、欧米各国が徐々に経済正常化に向かっている中、日本は遅れを取っている状況であり、リスクセンチメントが悪化した際の過度な円買いについてはドル/円の下落は限定的であると考えられる。その他の主な経済指標として30日(水)にADP雇用統計、7月1日(木)に米6月製造業PMI、6月ISM製造業景況指数の発表が予定されている。

(3)先週末までの相場の推移

先週(6/21~6/25)の値動き: 安値 109.72 円 高値 111.11 円 終値 110.79 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第一チーム 逸見 久貴

(1) 今週の予想レンジ: 1.1830 ~ 1.2000 131.00 ~ 134.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロは小幅に上昇。週初1.1869レベルでオープン。日経平均株価が前週末対比で1,000円超の下げ幅を見せ、リスクオフ地合いとなる中、ユーロ/円の下落につれてユーロ/ドルは1.1848まで下落し、週安値をつけた。その後、欧米株の回復とともにユーロは買い戻され、1.19台を回復した。22日は、特段材料がない中、軟調に推移し1.19台を割り込んだものの、ニューヨーク時間に入り、堅調な株式市場がユーロのサポート材料となったことやパウエルFRB議長のハト派な議会証言が確認されたことでドル売りが先行し、1.19半ばまで上昇。週央23日は、前日のパウエル議長のハト派発言によってリスクセンチメントが改善する中、ユーロ/円は堅調に推移。加えてドイツの6月PMIが予想を上回ったことがユーロ買いをサポートし、1.1970付近まで続伸。一巡後は、米金利の上昇に圧迫され、1.19前半まで下落した。24日は、欧州主要国の株式市場が堅調に推移する中、小確りとした推移。新規材料もなく、1.1930近辺でのみみ合う展開となった。週末、米のインフレ懸念が一時後退したことを受けドル売りとなる中、1.19台後半まで上昇。その後、米金利が上昇すると反落。1.1927まで下落し、1.1937で越週。

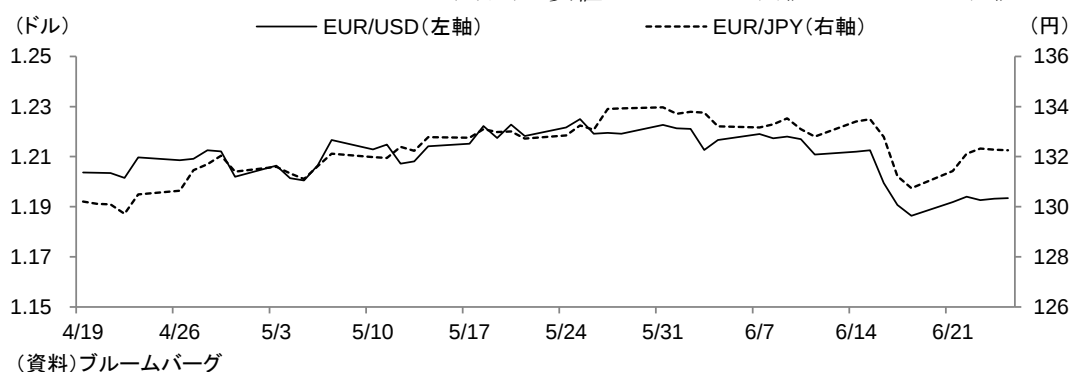
今週のユーロはやや軟調な展開か。欧州圏では目新しいイベントがない中、先週のバイデン米大統領のインフラ投資計画進展を受け、米経済への期待感は継続し、ドルが底堅く推移する展開を想定している。しかし、FOMCにてタカ派な金利見通しが示され、市場では米金融政策の転換点が意識される中、週末に控える米6月雇用統計には注目が集まっており、当該結果を前にドル買い一辺倒となる展開も想定し難い。1.18台半ばでは底堅さも確認されており、当該水準が下値の目途と考えている。また、コロナウィルスのデルタ株がグローバルに拡大し、移動制限やロックダウン再開への懸念が燃っており、引き続きコロナ動向には警戒したい。経済指標は30日(水)に1Q英GDP、6月ユーロ圏CPI、7月1日(木)に6月ユーロ圏製造業PMIが予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/21~6/25)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1848 高値 1.1975 終値 1.1937

(対円) 安値 130.05 高値 132.66 終値 132.25



3. 英ポンド

欧州資金部 芹澤 隆博

(1) 今週の予想レンジ: 1.3800 ~ 1.4050 152.50 ~ 155.50 円

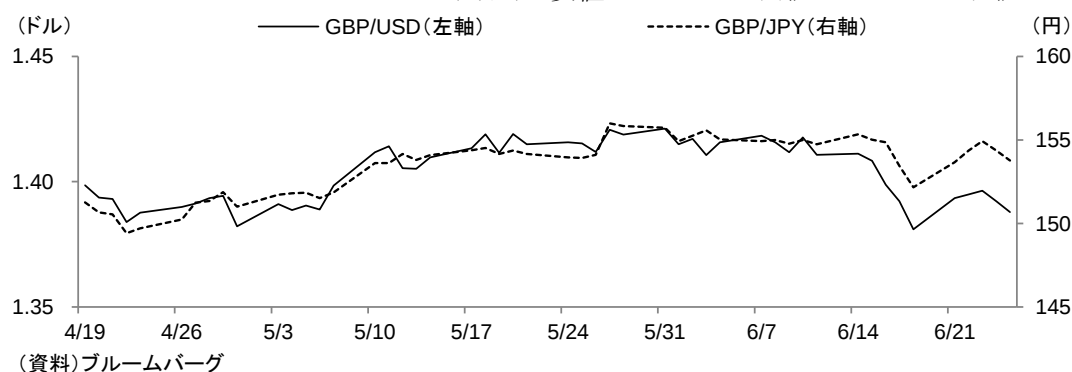
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、週前半は堅調な米株の動きに支えられたものの、ハト派な英中銀金融政策委員会の内容を受けて反落した。週初、それまでリフレトレードの巻き戻しで売られていた株が自律反発のような形で戻すとリスクセンチメントが改善しクロス円は堅調な展開。英ポンドもオープンの1.3800近辺から1.39台を回復した。23日に発表された英6月総合PMI(速報値)は61.7と市場予想より弱かったものの、影響は限定的。内訳をみると製造業やサービス業が弱くなっているものの、雇用指数はコロナ禍におけるロックダウンの段階的解除もあってか過去最高水準で推移しており、景気回復基調は継続していると考えられる。24日に開かれた英中銀金融政策委員会では、政策金利や試算購入額は市場予想の通り据え置かれたものの、早期の引き締めを警戒するなどハト派的なものとなった。これを受け利上げ織り込み(OISベース)も2022年5月までで12bpsと会合前対比で2bps剥がす形となり、英ポンドも1.3980近辺から1.3900を割れる水準まで下落した。その一方2021年4~6月期の実質GDP成長予測を5月の金融政策レポートから上方修正し前期比5.5%としており、ハト派ではあるもののあくまで市場を牽制する形に留まった。

今週の英ポンド相場は、底堅い動きを予想する。前述のとおり景気そのものの見方は悲観的ではなく、また通貨オプションにおける1ヶ月物25デルタリスクリバーサルもFOMC後のドル買いでポンドブットオーバーが拡大したもののすでに指標前の水準まで戻していることから、市場においてあまりダウンサイドへの警戒感を感じられない。FOMC、英中銀が終わり、次の中銀イベントは7月半ばのECB、8月のジャクソンホールと時間が空くことから、今週は底堅くも方向感を探る展開を予想する。他の注目点としては22日、英財務相が中銀金融政策委員会のブリハ委員の後任として米大手金融機関でチーフエコノミストを務めていたキャサリン・マン氏を任命。ブリハ委員は5月の講演にて2022年の利上げ可能性を示唆していたが、マン氏がどのようなスタンスをとるのが今後注目される。また、英中銀きってのタカ派であったチーフエコノミストのホールデン氏が6月をもって退任(今回の金融政策委員会においても、ただ一人資産購入額の減額に投票していた)。ベイリー総裁がどのような後任を任命するのかといった人事の行方も注目点となろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/21~6/25)の値動き: (対ドル) 安値 1.3787 高値 1.4001 終値 1.3870
(対円) 安値 151.32 高値 155.16 終値 153.76



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.7600 ~ 0.7800 83.40 ~ 85.90 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は小幅上昇。21日、前週からの豪ドル安の流れを受けて年初来の安値0.7478を付けた後、株価が上昇に転じる中、豪ドルは徐々に買いが優勢の展開に。ロンドンオープン後にリスク資産買い戻しの動きが更に強まると豪ドルの上昇スピードも速まり、0.7540近辺まで上昇。22日、鉄鉱石価格の下落などを背景に売りが先行し、0.7495近辺まで下落。NY市場時間に入り、パウエルFRB議長による米議会証言への警戒から米ドル売りの流れになると、豪ドルは上昇に反転。その後、パウエルFRB議長の発言がハト派的だったことから、利上げ前倒しの観測がやや後退。米株は上昇で反応し豪ドルも一時0.7564まで買い進まれた。23日、序盤は小安く推移。その後、鉄鉱石価格が上昇に転じる中、豪ドルは買い戻されて一時0.76手間まで上昇した。NY市場時間に入り、米5年国債入札が冴えない内容だったことなどから米国債金利が上昇すると、終盤にかけて米ドル買いが優勢となり、豪ドルは0.7570近辺まで下落。24日、特段材料が無い中、動意の薄い展開。25日、リスク選好の動きを背景に株価やコモディティ価格が堅調に推移する中、豪ドルもじりじりと上昇。米5月PCEコアデフレーターが前月比ベースで予想を下回る結果に、過度なインフレ懸念が後退。米ドルが売りで反応すると、豪ドルは一時0.7616近辺まで上昇した。しかしその後、米長期金利が1.5%を超えて上昇する動きを受けて、米ドルが買い戻されると豪ドルは0.7590近辺まで小幅下落して越週。

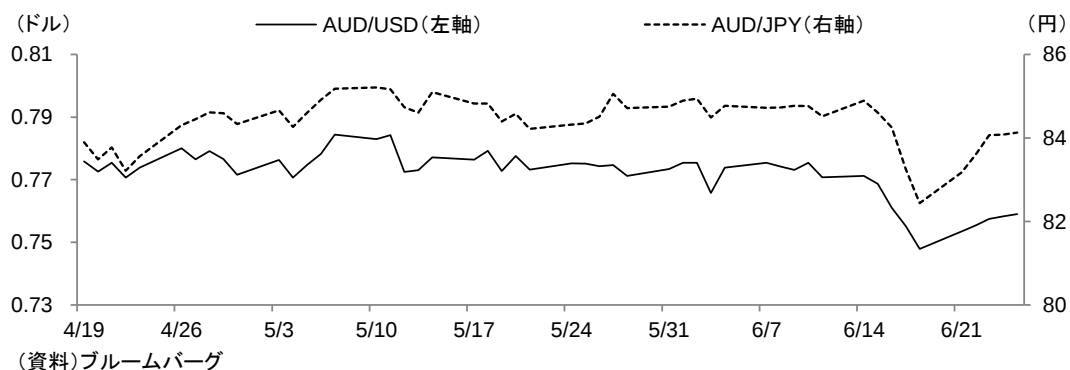
今週の豪ドルは引き続き方向感の出にくい相場展開を予想する。今週は1日の豪5月貿易統計、2日の米6月雇用統計に注目が集まる。今週は2日に予定されている米6月雇用統計が大きな注目材料となる。NSW州政府は26日、COVID新規感染者が二桁で増加継続していることを受けて、前日に発表したロックダウン対象地域の拡大と期間延長を決定。その他の州でも、感染拡大を受けて規制強化や都市封鎖が発表されている。これまでCOVID感染の封じ込めに成功し、順調に経済回復を遂げてきた豪州経済だが、今回のロックダウンが長期化すれば、経済の下振れは避けられないだろう。テクニカルには今月23日以降、豪ドルは200日移動平均線を上回って終了していることから、下向きの圧力が緩和している。6月のFOMCタカ派転向に対する市場の反応が一段落するなか、米株価回復とともに、豪ドルが元のレンジに向かって買い戻される可能性はあるものの、このままロックダウンが継続するようであれば上値が重い展開がしばらく継続すると思われる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/21~6/25)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7478 高値 0.7616 終値 0.7589

(対円) 安値 82.14 高値 84.26 終値 84.13



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償のみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。